

## 2016年度「平和カンパ」活動報告書

◆事業名 : トルコ(シリア難民)・紛争で故郷を追われた子どもたちへ

◆事業の背景と目的: シリア難民はトルコで安定した十分な収入を得ることが難しく、子どもを就学させる代わりに、長時間労働に従事させる児童労働の蔓延が深刻な問題となっている(Human Rights Watch, 2015)。AARは教育を受けることができていないシリア難民の子どもが、学校もしくはAARが運営するコミュニティセンターに通い教育活動を受けられるように、以下に報告する活動を実施した。

### ◆活動の概要と成果:

#### 1. 就学支援

トルコ共和国シヤンルウルフア県において児童労働に従事する子ども29人(21世帯)を特定し、下記の活動を実施した。

##### 1-1. 保護者および子どもとの話し合い

21世帯を訪問し、保護者および子どもと就学について話し合いの場を持った。21世帯のうち15世帯(26人)は、子どもの教育の重要性については認識しているものの、児童労働で得る収入が家計に不可欠であるため子どもの就学には消極的であった。しかし、児童労働で得ている収入と同額程度(月額300トルコリラ:約9,000円)の現金を本事業において支援することで、児童労働を止め、子どもを就学させることで合意した。21世帯のうち1世帯(3人)は、トルコの公立学校に関する情報を提供したところ、現金支援がなくとも子どもを就学させることで合意した。5世帯は、保護者や子ども本人が教育に無関心であること、あるいは児童労働に肯定的であることから、当会職員の数度に亘る説得にも関わらず保護者または子ども本人が就学に同意しなかった。

##### 1-2. 入学手続きと現金の支援

子どもの就学に同意した16世帯の子ども29人に対し、近隣の学校への入学・編入手続き支援および現金支援を実施し、24人(15世帯)が就学した。29人のうち2人は視覚障がいがあるためトルコの公立学校への就学は叶わず、代わりに当会のコミュニティセンターの活動に参加した。残りの3人(1世帯)は今年度の就学は実現せず、2017年9月からの就学となったため、学習の遅れを取り戻すため当会がトルコ語講師を派遣し、トルコ語の学習支援を実施した。

並行して、本事業終了後も子どもが児童労働に従事せずに就学を継続できる家庭環境を整えるため、他団体が実施している障がい者等特に脆弱なシリア難民を対象にした現金支援が受けられるように計らった。

#### 2. 啓発活動

子ども達が自身の権利に対する理解を深められるよう、トルコの家族政策社会省と共同で、シリア難民およびホストコミュニティの子どもを対象に啓発活動を実施し、65人の子どもが参加した。参加した子どもは、自身の権利や教育の重要性、もし危険に晒された場合には誰にどのよう

に相談したらよいか等について学んだ。



啓発活動の様子  
(2017年2月撮影)

#### ◆受益者の声

ハリル（仮名）は13歳の男の子で、1年前にシリアから、親戚が住むトルコのシャンルウルフアに避難してきた。ハリルの父親は未だシリアに残されている。

避難してきた当初は、母親と姉が仕立ての仕事をし、わずかな収入を得ていたが、すぐに家賃を払うためにミシンを手放さざるを得ない状況に陥った。一家は生計手段を失い、ハリルは学校に行くことをあきらめパン屋で配達の仕事をした。週6日、朝6時から9時まで15時間働き、収入は一日7トルコリラ（約210円）と少なく、ハリルは廃品回収の仕事をした。朝7時から夜7時まで、道路においてあるゴミ箱等からプラスチックや木材を集めて売り、今度は一日20TL（約600円）の収入を得た。しかし、道端でトルコ人の子どもにからかわれたり、叩かれたりすることも珍しくなかった。

AARは生活協同組合パルシステム東京の寄付により、児童労働に従事していたハリルの家庭に毎月300トルコリラ（約9千円）の現金支援を提供し、ハリルは2017年1月から学校に通い始めた。

「（紛争と仕事のために、）しばらく学校に行けなかったから、前に勉強したことの半分ぐらいは忘れてしまったけど、学校はすごく楽しい。友達も沢山できた。特に算数が好き。将来は数学の先生になりたい。」とハリルは言う。

AARはさらに、一家が再び収入を得られるようにミシンを提供した。ハリルの姉は近所の洋品店と交渉し、仕立ての仕事を受注し再び収入を得ている。ゆくゆくは自分で小さな店を営み、一家を支え、ハリルに勉強を続けて欲しいと考えている。



通学鞆を背負うハリル（前列右端）とその兄弟（前列3人）。  
後列中央は当会駐在員の宮越清美（2017年4月撮影）